論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　教育学　）	氏名	坂　田　　行　平
学位授与の要件	学位規則第４条第1・２項該当		

論　文　題　目

小学校体育科ボール運動における状況判断に関する事例的研究
：フラッグフットボールの防御を中心に

論文審査担当者

主　　査	教　授	木　原　　成一郎
審査委員	教　授	山　崎　　敬　人
審査委員	教　授	齊　藤　　一　彦
審査委員	教　授	大後戸　　一　樹

〔論文審査の要旨〕

身体運動の技能は，運動遂行中の環境の安定性と予測性の観点からクローズドスキルとオープンスキルの２種類の運動スキルに分類される。オープンスキルは「たえず変化し不安定な環境でなされ，予測が困難なスキル」（阪田ほか,1995）であるとされている。オープンスキルでは「自分がおかれている環境条件を的確に分析して把握し，何が適切な競技行為かを瞬時に決定するといった頭のなかの働き」である「状況判断」（中川,2000)が不可欠である。オープンスキルを用いるボール運動の学習では，試合中のさまざまな場面でどのような競技行為を選択すべきであるのかを瞬時に判断する「状況判断」（中川,2000）を向上させることが必要であると考えられる。ボール運動の攻撃における状況判断に関する研究は行われているが，防御における状況判断に関する先行研究は管見の限り見られなかった。ボール運動の試合は攻防の関係の中で行われるため，防御の状況判断を評価する方法があれば，ボール運動の試合場面の指導も改善できると考えられる。そこで本研究では，小学校４年生の体育授業を対象に、フラッグフットボールの試合中の防御における状況判断の変容を明らかにすることを目的とする。

論文の構成は以下のとおりである。第１章では，ボール運動に関する知識と状況判断の整理を行った。先行研究からボール運動に関する知識として,種目固有の「宣言的知識」（中川，2000）と特定の試合状況と競技行為が結びついた「手続的知識」「(中川，2000）が示された。記憶に蓄積された「宣言的知識」と「手続的知識」を用いた状況判断をもとに運動技能を伴った試合を行い，その結果を振り返ることで,「手続的知識」が獲得され,知識が洗練されていくと考えられる。

第２章では，先行研究から，体育科のボール運動の授業における教材化の必要性について検討した。そして，フラッグフットボールを教材として取り上げた小学校６年間のゴール型ボール運動の学習内容を整理し，小学校４年生を対象としたフラッグフットボールの試合場面における児童の状況判断を高めるための単元計画を具体的に提案した。

第３章では，第２章で開発したフラッグフットボールの単元計画に基づく授業実践の事例について，授業の中の試合場面における児童の状況判断の分析を次の３点の方法で行った。第１に，質問紙によるフラッグフットボールの状況判断テストを用いて，単元前後の

防御における状況判断の変容を明らかにした。その結果，マンツーマンディフェンスに関して，児童たちは単元前後における防御についての知識を獲得し，評価基準に合致した状況判断を増加させたことが明らかとなった。第2に，授業を実施した単元中の授業前後の試合における防御の状況判断を含んだ動きの変容を量的に分析した。その結果，単元後半の前後で試合場面における防御の評価基準に合致した動きの数が増加したことが明らかとなった。第3に，状況判断の変容をもたらした授業過程の実際を明らかにするために，グループを抽出し，学習カードや会話，試合場面での動きをもとに状況判断の実際を分析し解釈した。その結果，授業過程での状況判断の変容の実際を明らかにした。

最後に終章では，本研究における成果と課題を述べた。本研究は小学校4年生64名を対象に実践されたフラッグフットボールの試合場面を対象にし，戦術に関する知識を基盤に瞬時に行われる認知的な状況判断が体育授業の中でどのように行われているのかを明らかにした。しかし，本研究では特定のポジションやマンツーマンディフェンスの防御の状況判断に分析が限定されていることが課題であった。また本研究は，小学校において教科担任制で授業を行っている国立大学附属小学校という特殊な事例での研究であった。公立の小学校では国立大学附属小学校のような系統的な「体育科カリキュラム」(中西, 2021)の計画や実施及び改善は困難である。しかしながら，実際の授業では児童は攻撃と防御の状況判断を学習している。そのため，学級担任が体育授業を担任する公立の小学校を事例にボール運動の試合における防御の状況判断に焦点を当てた研究を行う必要がある。

本論文は，次の3点で高く評価できる。

1．第1に、小学校体育授業のフラッグフットボールの試合において，児童の動きと授業中の会話から防御の状況判断を推測して明らかにした点である。このような方法で，戦術に関する知識を基盤にして瞬時に行われる認知的な状況判断が実際の授業の中でどのように行われているのかをわが国で初めて明らかにした点に意義がある。

2．第2に、フラッグフットボールの試合において質問紙による状況判断テストを用いて調査を行い，単元前後に児童が防御の状況判断で用いた知識を測定し，評価基準に合致した状況判断が増加したことを明らかにした点である。フラッグフットボールの試合を対象に、児童が防御の状況判断で用いた知識を測定し評価基準に合致した状況判断が増加したことをわが国で初めて明らかにした点に意義がある。

3．第3に、ボール運動に関する知識や試合における状況判断に関して、児童の防御に焦点化し，その単元前後の変容を明らかにした点である。これまで，ボール保持者や攻撃に関する研究は蓄積があるが防御の研究はほとんどなされていない。しかし，ボール運動の試合では攻撃と防御の相互の質的な高まりが試合の戦術を発展させるため，防御の状況判断に焦点を当てた本研究には試合で児童が学習する戦術全体の解明に迫る観点を示した意義があると考える。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和　5年　2月　13日